
学園黙示録×色々

戦場へ行く破壊者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録×色々

【Nコード】

N6617M

【作者名】

戦場へ行く破壊者

【あらすじ】

仮面ライダーの力を持ったオリ主がこの世界で戦っていく話です。たぶん。投稿が亀のように遅いです。

学園黙示録×色々 プロローグ（前書き）

頑張っていると思います。

学園黙示録×色々 プロローグ

くプロローグく

おつす！俺の名前は「紅 隼人」高校二年生だぜ！実は俺は死んだ！え？いきなり何言ってるんだこいつ？って思ってるだろうけど本当なんだなこれが。現在進行形で白い空間にいます。実は俺が死ぬ前を見た光景は、子供が引かれそうになってその子を助けたのまではよかったんだけど、そのかわり子供ではなく俺が引かれてしまったんだよねえ。まあ、こどもが助かったからよしとしますか。ま、短い人生だったけどそれなりに俺は楽しんでたからいいや。

「にしてもここはどこだ？」

天国なのだろうか？それとも地獄なのだろうか？天国と地獄にしては、自分の想像と違うな。

「ざんねんじゃが、ここは天国でも地獄でもないぞい。」

……なんだこのじじいは？いきなり目の前に現れやがった。それに、天国でも地獄でもない？それじゃあここはどこなんだ？というか、心を読まれてる？

「いきなり失礼じゃのう。ワシはお主たち人間で言う神じゃから、お主の心を読むのも簡単じゃ。それとここはワシがお主を呼ぶために作った空間じゃ。」

……よし、じじい一回病院行って出直してこい。

「ちょっとそれはひどいんじゃないかなあああ！！ワシ神様だよ！！これ本当じゃから！！」

「……わかった、百歩譲ってお前が神だとしてその神が俺に何の用事があるんだ？」

「最近の若いもんは人（？）の話信じんの。すいません、ごめんなさい！！お願いじゃからその振り上げた拳を下げて！！」

「つたく、早く要件をいえ。」

「冷たいの。おほん、お主を呼んだのは実は……………」

「……………ゴクリ。」

「お主を間違つて殺してしまったからじゃ。」

「……………なに？」

「いやすまんの、書類の手違いで間違つてころしてしまったんじゃ。だから「ちつとばつか歯あ食い縛れや。」」

「ええ！！ちつとまつ……ぎゃああああああああああああ！！」

「ボカバキベキドコグシャ！」

「……………」

・
「どうも、すみまじえんでじた。」

ボロボロになった神が仁王立ちしてる隼人の前で正座していた。

「それで、間違つて俺を殺した紙が俺に何をしてくれんだ。」

「あの、漢字が違^{ギロリ}イエナンデモナイデス。」

隼人は何か言おうとした神をひと睨みで黙らせた。

「貴方様を間違つて殺してしまったので、他の世界に転生させることにしました。後何か欲しい能力や必要なものがあれば言うてください。」

「そうだなあ〜。」

「一つ目、最強の弟子ケンイチで使う技とその技を使える体にしろ。
二つ目、全ての平成ライダーに変身できるようにしろ。三つ目は、
エボニー&アイボリーをよこせ（弾無限）。それぐらいだ。」

「わかったぞい。ほいっと。」

紙が言葉を発したと同時に、俺の体が光りだした。

「これでよし。ライダーとエボニー&アイボリーは、お主が念じれば使えるぞ。」

「分かった、そういえば俺はどこ这个世界に行くんだ？」

「学園黙示録じゃ。それじゃあ、がんばるのじゃぞお。」

と言ったとたん、足もとに穴が開いた。

「てめえー、このくそじじいいいいいい！学園黙示録つてなんだああああ！！必ずぶつとばしてやるううううう！！」

そう言葉を発しながら穴に落ちて行った隼人だった。

こうして彼の新たな人生が始まる。そしてその瞳にはなにをうつすのだろうか。

学園黙示録×色々 プロローグ（後書き）

駄文としか言いようがないな。

学園黙示録×色々 第一話（前書き）

びみょくだなあ〜と、思ったんですけどこれが自分の限界です。

学園黙示録×色々 第一話

〈第一話〉

ちいーっす！俺の名前は紅 隼人っていうのは知ってるな。転生したこの世界のことを色々調べたところ、特になにもなくライダーに出てくる怪物もいないし、悪魔とかもない世界だった。一部戦争とかもあつたが、武力介入して潰したことぐらいだな、それを除くといったって平和な世界だ。

「平和だなあ〜。」

今俺は高校の屋上で寝そべっている。授業？つまらないからパス。今いるこの世界で俺には家族がいる。四人家族で親父と母さんと俺と妹がいる。親父は警察官で母さんは小学校の教師をしていて、妹は俺と同じ高校にいる。いたって普通の家庭で暮らしている、だが俺にとってはとても幸せな暮しであつた。

「にしてもホント、平和だなあ〜。」

眠い瞼を閉じようとしたら屋上のドアが開いた。

「ん？なんだ孝か。」

「なんだとはなんだよ、僕が来ちゃ悪いのか？」

こいつは「小室 孝」俺の母さんの知り合いの息子で、小学校からの親友だ。

「全然むしろ暇だったから丁度いいな。そういえばお前授業はでなくていいのか？」

「その言葉そのまま返すよ。」

俺が意地悪く言つと苦笑いしながら孝が言ってきた。

「俺は頭良いからいいんだよ。」

「普通自分で言うか？いや、もう一人いるか。昨日あまり寝てなくてね、授業もタルいし」

孝が途中で言葉を切つたので、孝の目線を追うと正門に何かがいた。それは一人の男が正門の門にただ体をぶつけているだけだった。正門には教師が数人来て注意しているようだ。

「なんだあれ？不審者か？」

「にしては変じゃないか？体を門にぶつけてるぞ？」

そうこうしてるうちに一人の教師が相手の胸倉を掴んでいた。胸倉をつかんだ教師と女教師が何か言っていると、その男がいきなり教師に噛みついたのだ！その教師は喰いちぎられた腕をおさえながら倒れた。数人の教師が彼を助けようとしたが、その教師は糸が切れた人形のように動かなくなった。

「何かヤバくねえか？」

「・・・・・・」

俺が軽いノリで孝に言うが顔を青くするだけだった。そう言っていると、教師が目を覚ましたようだ。周りの教師が声をかけると、女教師が倒れた教師に噛みつかれた。

「な・・・なんだってんだ一体・・・」

「・・・・・・・・」

俺と孝は驚いていた、教師同士で殺しあう光景に。

「孝、マジでやばそうだ行くぞ！」

「あ・・・ああ。」

呆然としてる孝に声をかけて俺たちは屋上から立ち去る。

「孝、おまえはどうする？教室に行くのか？」

「ああ。麗と永にこのことを伝えに行く。」

「分かった。俺は妹が心配だからそっちに行く。」

「気をつけるよ。」

「お前もな。」

そう言っただけで俺たちは、別れた。

走ってる途中放送で悲鳴が聞こえた、俺は妹のいる教室に向かって

る途中一体の何かがいた。

「チッ、こいつらもうここまで来てるのか。」

俺は舌打ち目の前にいる何かを見据えていると、向こうはこちらに気づいているのかこちらに向かってくる。

「こいつ生きてる感じがしないな、まるでホラー映画に出てくるゾンビみたいだな。」

そうこう言ってるうちに襲ってきた。

「まあ、雑魚に変わりはない。」

そう言っで一瞬でそいつの後ろを取り首をネジ曲げ、そいつは動かなくなった。

「本当にゾンビみたいだなあ。さてと、妹のどこに行くか。」

隼人は妹のいる教室へとまた走りだした。

学園黙示録×色々 第一話（後書き）

短いなあ。次はもう少し長くかけるように頑張ります。

学園黙示録×色々 第二話（前書き）

オリ主がついに仮面ライダーに変身します。自分の好きなライダーです。

学園黙示録×色々 第二話

学園黙示録×色々 第二話

私の名前は「紅 鈴音」です。私は今日の前の光景が信じられませんが、先ほど放送で避難警告が流れていると突如悲鳴が放送から聞こえて間もなく、学校内がとてつもないパニックになりました。周りのクラスメートが我先にと教室から出ていき、邪魔な人は蹴飛ばしたり殴ったり突き飛ばしたりしています。さっきまで普通のクラスメート、楽しく話してた友達だったのが、一つの放送でここまで野蛮な猛獣のようになってしまった。

私ですか？私は教室の端っこに座っている友達の所で騒ぎが一旦治まるのをまっています。彼女の名前は「津島 藍」という。家のお隣さんで親友です。

「藍、だいぶ騒ぎが納まってきたからそろそろ行こう。」

「うん、分かった。」

教室には鈴音と藍しかいなかった、そして藍の手を取り教室を出た。

「鈴音ちゃん、一体どこに行くの？」

「私は兄さんと合流しようと思う。」

「隼人さん？でもどうやって？」

藍が疑問に思ったことを口にした。

「多分だけど兄さんもこっちに向かってきてると思う。だから階段のところで待ってれば必ず合流できると思う。」

「うん、私もそんな気がする、隼人さん優しいから鈴音ちゃんのことすごく心配してると思うよ。」

「兄さんは藍のこと心配してくれてるよ、かわいい妹がもう一人できたと言ってたから。」

「妹、か。」

藍が少しがっかりしていたが、兄さんは渡さないぞ！！そう言ってるうちに階段の所に着いた。

「ふう〜。まだ隼人さんは来てないみたいだね。」

「そのようね。少し待ってれば来るでしょう。」

そういつて階段に座り込む。

「にしてもこの学校で一体何が起こってるのよ。」

「ホントにね、なんなんだろ。」

「少し下を見てくる。」

そう言っで行こうとすると、藍に服の端をつかまれた。

「わ、わたしもいく。」

「だいじょうぶ、すぐそこなんだから。・・・ん？」

藍にそう言って階段を下りてたら、上ってくる複数の人影があった。だがそれは。

「!？」

すでに人ではなかった。

「藍!! 逃げるわよ!!」

「え? どうしたの鈴音ちゃん? だれかいたの？」

「いいからさっきの教室に行くわよ!」

藍の手を取り、全力で走った。私のカンが逃げろといっているあれは既に人間じゃないとまともにやりあえば死ぬと、それに数が半端なく多くあれに飲まれたら終わりだと分かる。そして教室の前まできて、廊下の窓の向こう側をみた私は絶句した。

「な、なにあれ？」

「・・・・・・・・。。。」

私は藍の言葉に何も言えなかった、そこはもう地獄としか思えなかった。人が人をいや、人間であったものが人間を喰っていた。それはホラー映画みたいなゾンビ「きゃあああああ!!」藍の悲鳴で意識を取り戻す。

「藍!! どうしたの!!」

「あれ!!」

そう言つて藍の向こう側に、さっきの奴らがすぐそこまで来ていた!!

「藍教室に入るよ!」

「なんで!? 反対から逃げよう!!」

「こっちからも来てるのに、向こうにアレがないとわ限らないわ!」

そして藍を教室にいれて二つの扉の鍵を閉めた。これで少しは時間が稼げるだろう。だがそれと同時に閉じ込められた。

「ヤバいわね。これからどうするかが問題ね。」

「鈴音ちゃん、これからどうする?」

「せんずは武器になるようなと食料を探し、次のことはそれから考えましょ。」

私と藍は机の中からロッカーの中まで探した。だが日常の生徒が武器など持つてゐるはずはないので、集まったのがモップ（先が尖つてゐる）と椅子ぐらゐしかなかった。食料は弁当とかがあったので大丈夫だろう。教室の外ではさっきからアレがあゝうゝいつている。ほんとにゾンビみたいだ。

「隼人さんはだいじょうぶかなあ。」

「・・・・・・・・。」

「う、ごめんね鈴音ちゃん一番心配してるのは鈴音ちゃんだよね。」

「うん、大丈夫。兄さんのことだからむしろピンピンしてると思う。」

そう元気に振る舞っているが内心では不安でいっぱいだった。兄さんはいつもチャラけた調子だがいざって時はすぐカッコよく見える、そんな兄が自分は好きである。

「救助隊とか軍とか警察は来ないのかな？」

「分からないわ。多分この調子だと街のほうもこの学校と同じありさまでしょうね。そのせいか警察に電話しても回線が混みあってでないし・・・・兄さんも留守電になってるしね。」

「鈴音ちゃん。」

落ち込んでいる私の手に藍が手を重ねた。

「元気出して、鈴音ちゃん。隼人さんはきっと無事だよ、鈴音ちゃんを追いて死んだりしないよ。だから元気出して、ね。」

「・・・そうよ、ね。兄さんが奴らなんかには殺されたりしないよね。」

「うんうん!」

「うん！それじゃあここから逃げる方法考えないて（バリーン！！）
嘘！！バリードが敗れた！！」

バリードを破った奴らは雪崩の如く襲ってきた。

「藍！！」

「鈴音ちゃん！！」

私たちはモップと椅子を持って端っこに追い詰められた。あたし達は絶望を感じた。すでに奴らは教室に10体ぐらい入っていた。

「ごめんね藍。守りきれなくて。」

「ううん、私は鈴音ちゃんと友達になれて嬉しかったよ。」

「うん、私も。」

二人はこの空間で笑いあった。だが奴らはそれをお構いなしに少しずつ近づいてきた。

「さようなら、兄さん（隼人さん）」

そして彼女たちは目をつぶり自分の最期を待った。だがそれは訪れなかった。

（ギャアオ！）

「え。」

二人の目の前に恐竜の形をしたオモチャがあつた。それは、自分たちの目の前にいた奴らを薙ぎ払っていた。その小さな体のどこにあるのか？あれは本当にオモチャなのか？そんな思考がよぎった。そうすると教室の外から自分たちの大切な人の声が聞こえた。

「鈴音、藍！！無事か！！」

「「兄さん（隼人さん）！！」」

私たちは兄さんを見ただけでとてつもない安心感を得た。

「そこにいろ、今から助ける！」

「「うん！」」

兄さんが頷く、兄さんは叫んだ。

「こい！フアング！！」

すると同時に目の前にいた恐竜の形をしたオモチャが兄さんの手のひらに乗った。その恐竜を折りたたみメモリーみたいのをだしもう片方の手に黒いメモリを出した。そしていつのまにか兄さんの腰にベルトみたいなのが出現した。

（フアング・ジョーカー！！）

「変身！！」

そう叫んで兄さんは黒いメモリーを挿し次に恐竜を折りたたんできたメモリーを挿しこんだ。

（ファング・ジョーカー！！）

その音声とともに、兄さんの姿が変わった。そして跳躍して私たちの目の前に背中を見せたまま降り立った。

「大丈夫か？」

「・・・はい。」

私たちは見惚れたその姿にその背中に。その姿は赤い複眼に白と黒を体の真ん中で縦に線を引いてどこか獣をイメージできる姿だった。恐ろしくはなかった、その背中はいつもと違いとてもたくましく安心できた。

「こいつらは、俺がかたずけるからジツとしてろよ。」

「・・・はい。」

「さてお前ら、よくも鈴音と藍を虐めてくれたな。」

腕を上げて奴らを指さし

「さあ、お前らの罪を・・・数えろ。」

そして「仮面ライダーファング・ジョーカー」に変身した「紅隼人」は自分の大切なものを汚す敵を排除する。

学園黙示録×色々 第二話（後書き）

やっちゃったなあ。どうしよう？感想とかリクエストとかこういう風にしたいほうがよくね？みたいなのであれば書き込みよろしくおねがいします。

学園黙示録×色々 第三話（前書き）

原作キャラとの合流です。ちゃんと出来てるでしょうかね。

学園黙示録×色々 第三話

〈学園黙示録×色々 第三話〉

俺はファングに反応があったので、走るスピードを上げた。ファングには鈴音と藍に何かあった時のための護衛としてつけてた、ファングが動いたと

いうことは護衛対象が危険に迫ったとき、自立的に動くようになった。そして鈴音と藍の教室が見えてきた、教室に入った瞬間に俺は叫んだ。

「鈴音、藍！！無事か！！」

「兄さん（隼人さん）！！」

俺は二人の姿を見て安心した、二人を安心させるために呼びかけた。

「そこにいろ、今から助ける！」

「うん！！」

そして俺は二人を守ってくれた相棒を呼ぶ。

「こい！ファング！！」

読んだ瞬間にファングは二人のそこから跳躍して俺の手に乗った。

「ありがとなファング、二人を守ってくれて。」

（ギヤアオ！）

「それじゃあ、もうひと働き頼むぜ。」

（ギヤアオ！）

いい返事をしてくれたファングの足を折りたたみ尻尾を回転させて、ファングについてるメモリーとジョーカーのメモリーについてるボタンを押した

。

（ファング・ジョーカー！！）

「変身！！」

そして最初にジョーカーのメモリーを挿し、次にファングのメモリーを挿した。

（ファング・ジョーカー！！）

音声とともに俺の姿が変わる。

「仮面ライダーファング・ジョーカー」えと。

跳躍して二人の目の前に降り立つ。

「大丈夫か？」

「・・・はい。」

ううん。やっぱりこの姿に驚いているのか、二人の眼が大きく見開いている。

「こいつらは、俺がかたずけるからジツとしてろよ。」

「・・・はい。」

俺は二人に大人しくしているようにいい、目の前の敵を睨んだ。

「さてお前ら、よくも鈴音と藍を虐めてくれたな。」

俺は腕を上げて奴らを指さし決め台詞を言った。

「さあ、お前らの罪を・・・数えろ。」

そういつて、俺は奴らに突っ込んでいった。

腕を振るって切り刻み、頭を掴んで投げ飛ばし、倒れた奴の頭を踏みつぶした。だがそれでも、奴らは向かって来る。

「チツ、しつこい奴らだ。」

手をベルトのところへ持つていき、指でタクティカルホーンを一回弾く。

(Arm Fang)

音声とともに右上腕に出現するアームセイバー

そしてアームセイバーで周りの敵を一気に切り刻んだ、首を跳ね飛ばし、上半身と下半身を切断した。そして、そこに残ったのはただの人間だった屍

の残骸だけだった。

「一先ずかたずいたな、二人とも無事か？」

そう言つて二人に呼びかけたが、二人はただ呆然としていた。

「おゝい。大丈夫かあゝ。」

もう一回声をかけてみる。

「「えっ！！あ、はい大丈夫です！！！」」

「ならよかった。というか鈴音、なぜお前まで敬語なんだ？」

「あ、いえ少し驚いていたので。」

「まあ、確かにいきなり自分の兄が仮面ライダーに変身したら驚くわな。」

「「仮面ライダー？なんですかそれ？」」

鈴音と藍の声がさつきからハモっているな。

「そつだなあまり時間がないから簡単に言つと仮面ライダーってのはな、正義の味方だ。」

「正義の、味方。」

「ああ、一先ずここを出るぞまた奴らが群がってくる前に。」

「うん、分かった。」

「はい。」

そうやって、俺を先頭に教室を出た。そして俺はとある所に向かった。

「ねえ兄さん、どこに向かつてるの？」

「ん？職員室だ。」

そこら辺にいる奴らを片っ端からアームセイバーで切り刻んで進んでいる。

「どうして職員室に行くんですか？」

「それはな藍、職員室なら車のキーがあるはずだそれに乗ってここから脱出するためだよ。」

なるほどあー。っと二人が納得してくれているうちに、前にいた一匹を外に蹴り飛ばした。蹴り飛ばした後に、パンという銃声が聞こえた。

「今の音は銃声か？」

「という事は軍が警察が来てくれたんでしょうか？」

「いや、音からして一人しか居ない。あと、たぶん銃じゃないな。」

「それじゃあ何なんでしょう？」

「わからないが、一先ず人が居ることが分かったんだ言ってみよう。」

・
・
・
・
・

僕は隼人と別れた後、教室に行つて麗と永を連れて一緒に教室から抜け出した。途中で永が奴らになってしまった教師に噛まれてしまったが、そのま

ま屋上に出て永の提案で天文台のこもることになった。ここまではうまくいった、だが噛まれた永は奴らになってしまった、そして僕はこの手で永を

。その後は麗と一緒にここから脱出し親に会いに行こうと言う話しになって。そのために、僕と麗は屋上を脱出した後は銃声の音がきこえるほうへ走

った。着いた場所は職員室だった、そこにはもう一人の幼馴染の「高城 沙耶」と同じクラスの「平野 コータ」がいた。

僕たちが着くと同時に二人の女性がきた、一人は校医の「鞠川 静香」で木刀持った人は僕は知らなかった。着いた瞬間、高城が電動ドリルを奴らの

一匹の頭に突き刺していた。

「私は右の二匹をやる!!」

「麗!!」

「左を押さえるわ!!」

麗は下からモップの先端を喉から頭蓋骨に向けて突き刺した。木刀持った女性は二匹の奴らの胸を突き怯んだところに、木刀で頭を潰した。僕は助走

をつけて奴らの頭に金属バットを振り下ろした。

「高城さんっ、大丈夫?」

「みやもとお・・・」

麗は高城に近づいて大丈夫か聞いている。そして僕たちは木刀を持った人と自己紹介をした。彼女の名前は「毒島 冴子」三年生で僕たちの先輩だ。

剣道部主将で、2年生時に全国大会で優勝した実力の持ち主だそう
だ。

「よろしく」

そういつて毒島先輩は僕たちに微笑んだ。

「なにさみんなデレデレして・・・。」

高城がフラフラしながらも言ってきた。

「何言つてんだよ 高城」

「バカにしないでよ！アタシは天才なんだから！その気になったら誰にも負けないのよ！！」

「もういい、充分だ。」

高城は毒島先輩のその言葉に気を許してしまったのか、泣いてしまった。僕はそんな姿を見るのも悪いかと思い、目を逸らそうとしたらヤバいと思っ

た。

「毒島先輩！後ろ！」

一匹しとめそこなったのか、まだ動いてる奴らがいた。

「！！！」

毒島先輩も今気付いたのか、木刀を振るおうとするが肩を掴まれてしまい振るうことが出来なく、噛まれてしまうその瞬間。

(Shoulder Fang)

そんな音声が聞こえた瞬間、僕の真横を何かが通って毒島先輩に噛み付こうとした奴らの首と胴体が切り刻まれていた。僕は後ろを振

り向いた、そこ

には赤い複眼に白と黒を体の真ん中で縦に線を引いてどこか獣をイメージできる姿がそこにあった。

「よう、孝。無事だったか。」

その声はどこか聞き覚えがある声だった。

・
・
・
・
・

俺は二人と一緒に銃声があったところまで来た、そこには見慣れた奴もいたし初めて見る奴もいた。そのうちの一人木刀を持った人が後ろから襲われ

かけていた。助けようにもまだ少しここから距離がある。

「（それならば！！）」

俺は手をベルトのところへ持っていき、指でタクティカルホーンを二回弾く。

(Shoulder Fang)

音声とともに肩に出現、着脱してブーメランとしてや手持ちで使用するショルダーセイバー

ショルダーセイバーを俺はまた犠牲者が出る前に奴らにむけてブー

メランのように投げた。そして奴らの首と胴体を切り刻んだ。

「よう、孝。無事だったか。」

孝に声をかけてみた。

「隼人、か？」

「正解。声だけでよく分かったな。」

「あ、ああ、なんとなくそんな気がして。」

孝はまだ戸惑ってるようだ。俺が苦笑いしていると木刀持った人が近づいてきた。

「さっきはありがとう助かった。」

「いってことよ、俺は助けたいから助けただけだ。」

「それでも君のおかげで私は奴らにならなくてすんだのだ、ありがとう。私の名前は毒島 冴子だ。よろしく。」

「俺の名前は紅 隼人だ。こちらもよろしく。」

そういつて俺と毒島は握手した（格好はWのままだが）。すると服の端を妹に引っ張られた。

「おっとそうだった、こっちは妹の紅 鈴音でこっちは妹のクラスメートの津島 藍っていうんだ。」

「妹の鈴音です。」

「鈴音ちゃんの友達の藍です。」

「ああ、私の名前は毒島 冴子だ。よろしく。」

「自己紹介も終わったところで、また来たぞ!!」

沸いてくるように奴らが現れた。

「くっ、なんて数だ。」

毒島が先手を討とうとしたが、俺が手で制した。

「先輩は休んでろ。一撃で決める!」

俺は手をベルトのところへ持っていき、指でタクティカルホーンを
三回弾く。

(F a n g M a x i m u m D r i v e)

ファングサイドの脚にマキシмумセイバーを出現させ、跳び回し蹴
りの要領で敵を切り裂く技

「ファングストライザー!!」

奴らに命中すると、恐竜の頭部のようなオーラとともに、爆発した。
立ち上がり俺は変身をといた。

「よし今のうちに、職員室に入るぞ。」

俺はそうだったのだが、全員呆然としている。それから全員が正気に戻った後職員室の中に入った。全員がああ姿は何なのか、最後のあれは何なのか

聞いてきたが、軽くライダーについて説明した。

「つまりは、人間を化け物から守るのがその仮面ライダーというのだな？」

「まあ、そんな感じだな。」

「それで最後のアレはそのライダーの必殺技ってことね。」

「そういうことだ。」

「まるで信じられない話だけど、実際に見せられるとなにもいえないわね。」

「そんじゃ、ライダーの話は終わり。早く脱出しようぜ。」

「でもどうやって？」

麗が言ってきたので俺は俺の考えを言う。

「車つかってここから脱出すればいい。」

「鞠川先生、車のキーは？」

「あ、バックの中に・・・」

「うつつ」

反応からしてみんな乗れる車ではなさそうだ。部活遠征用のバスがあるのでそれでここを脱出して、順番に家族の無事を確かめにいくことになった。

あとテレビのニュースを見てこんなことが起こってるのは、日本だけではなく世界中がこうなっていることが分かった。

「さて行こうぜ、俺たちが今することは家族の無事の確認だ。」

「ああ、いこう。」

「どこから外へ？」

「駐車場は正面玄関が一番近い。」

「行くぞ!!」

俺たちは進む、向かう先にたとえ残酷な結果しか待ってなくても。

俺は守り通す、俺の大切なものをこの力を使って守ってみせる。

学園黙示録×色々 第三話（後書き）

感想とか出して欲しいライダーがいたら教えてください。あと、注意する点があれば教えてください。

学園黙示録×色々 第四話

学園黙示録×色々 第四話

職員室から出た俺たちは、正面玄関を目指して進んでいると、悲鳴が聞こえたのでそこに行くとな数人の生徒が奴らに襲われてたので、助けることにした。平野が二匹を撃ち倒し、孝と麗がバットとモップで一匹ずつ倒し、毒島が木刀で頭を叩き割った。俺？俺は首をへし折ったり頭掴んで人間手裏剣のように投げ飛ばした。それで助けた奴らも一緒に来ることになって、正面玄関まで来たのは良かったのだがそれなりの数がいた。孝が下駄箱に隠れながら奴らを覗いている。

「やたらいやがる。」

「見えてないから隠れる事ないのに。」

「じゃ、高城が証明してくれよ。」

そう言われて高城が戸惑っている。

「たとえば高城君の説が正しいとしても、この人数では静かに進むことなどできん。」

「ああ、校舎の中じゃ襲われた時、身動きがとりにくいからここを突破するしかない。」

「誰かが……確かめるしかあるまい。」

そこで俺たちは沈黙した。

「よし、僕が「待て、孝。」」

「俺が行く。お前は麗を守ってやれ。」

何か言われる前に俺は奴らの前にでた。

「本当に見えてないようだな。」

それなら。俺は落ちてた靴を拾い遠くに投げて、その靴が何かにぶつかって大きな音が鳴るとそっちの方に奴らが移動したしたので、玄関のドアを開けて孝達を手招きで呼んだ。俺はこの時無事にうまくいったと思ったが、棒を持った一人の生徒が焦ったせいか、ドアに棒をぶつけてしまい甲高い音が鳴ったことによって、奴らはこちら存在を認識した。

「走れ!!」

「なんで声出したのよ!黙っていれば、手近な奴だけ倒してやりすごせたかもしれないのに!」

「あんなに大きな音が鳴ったんだ、たいして意味はない!それより、喋ってないで走れ。」

俺たちはなるべく邪魔になる奴だけ倒しながら、バスに向かって走った。

「もうすぐだ!!」

すでにバスは目と鼻の先であつた。だがバットをもつた一人の生徒が二匹の奴らに噛まれそうになっていた。俺はエボニ・&アイボリーを出現させた、すでに奴らには俺たちの存在がばれているので構わないだろうと判断し、引き金を引いた。放たれた弾は見事奴らの脳天に命中した。

「おい、大丈夫か!!」

「は、はい!」

「早く下がれ、あとそのタオルは捨てて行け!」

「わ、わかりました!」

俺はエボニ・&アイボリーを使って援護しながら、バスへ向かった。

「急げ急げ急げ!!」

「いつまでも支えられんぞ!!」

「紅君!!小室君!! 全員乗った!!」

「先輩が先に!!」

俺と孝が最後に乗り込み、孝がドアを閉めようとしたら、声が聞こえた。眼鏡をかけた教師と複数の生徒がこちらに向かってきていた。

「誰だ?」

「三年A組の紫藤だな。」

紫藤聞いたことがある名前だ、奴からはあまりいい話を聞かないな。思考にはいつてるうちに話が進んでたようで、孝が助けに行こうとしたら麗に止められていた。

「麗！！なんだってんだよいったい！！」

「助けなくていい、あんな奴死んじやえばいいのよ！！」

そうこうしてるうちにドンドン近づいていた。

「！！！！」

俺はこちらに向かってくる女生徒の一人が足をくじいたのか、動けない姿をみてしまった。教師の服を掴もうとしたが失敗したらしい。

「っ！！紅君！！」

俺はバスから降りたところで、毒島に止められた。

「どこに行くつもりだ！！」

「あそこにいる奴を助ける。」

「こう言うてはなんだが、彼女を助けるのは諦めた方がいい。君が仮面ライダーの力を使っても、あの距離は遠すぎる。それに君自身が孤立してしまいかねない。」

だからと言って、諦められるか！！人の未来を！！壊させてたまるか！！

「大丈夫だ。俺は絶対あそこにいる生徒を助けだして戻ってくる！」

そう言っただけは「ファイズドライバー」を装着し「ファイズフォン」を取り出し、慣れた手つきで変身コードをいれる。

(5・5・5)

(Standing by)

そしてファイズフォンを天に掲げるようにあげる。

「変身!!」

そう言っただけドライバーのバックル部 フォンコネクター にフォンを突き立て左側に倒す。

(Complete)

その音声とともに赤く光った。しばらくすると光が納まり、俺はギリシャ文字の (ファイ) を模した「仮面ライダーファイズ」へと変身した。

「く、紅君。その姿は？」

「仮面ライダーファイズ。後でまた説明する、今はあいつを助ける！」

そう言っただけ俺は「ファイズポインター」にミッションメモリーをさしこみ、リストウォッチ型コントロールデバイス「ファイズアクセ

ル」のプラットフォームからアクセルメモリをファイズフォンのプラットフォームに挿入する。

(Complete)

音声とともにアクセルフォーム・プログラムが起動し、「ノーマルファイズ」から「アクセルフォーム」にフォームチェンジした。俺はファイズアクセルのスタータースイッチを押し、アクセルモード起動により10秒間あらゆる動作を通常の1000倍の速度で行うことが可能となる。

(Exceed Charge)

音声が発せられると共に、フォトンストリームを經由してフォトンブラッドがファイズポインターに注入された。そして俺は飛び上がり前方一回転して奴らに足を突き出すが、そして女生徒の周りにいる奴らにファイズポインターから円錐状の赤い光を放って目標をポイントし、ファイズの必殺技の1つ「クリムゾンスマッシュ」を蹴りを放つ。

「てやあああーーーーー!!」

俺は一匹また一匹と奴らの体に風穴を開けていき最後には、赤いの文字が浮き出て崩れ落ちた。俺は女生徒の前に降り立ってアクセルフォームからノーマルファイズえと戻り無事かどうか尋ねた。

「無事か?」

「は、はい!」

「よし、いくぞ。」

「っ！いたっ。」

女生徒は足をくじいて立てないようだ。

「足をくじいたのか、すまないが我慢してくれ。」

「えっ？きゃあっ！」

俺は一回謝って彼女を抱きあげた。いわゆるお姫様だっこだ。

「少し揺れるが、我慢しててくれ。」

「は、はい。」

そっいつて俺は走った。ファイズは100mを5・8秒で走れるのであつというまにバスについた。

「紅君、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。言っただろ、ぜったい戻ってくるってな。」

俺は変身を解きながら毒島に笑いかけながらいった。そしてバスの中に入りさつきからお姫様抱っこしている女生徒を近くの席に座らせた。にしてもさつきからこっちをジッと見てくるんだがどうしたんだ？二人とも顔が赤いし。

「オイ、大丈夫か？顔が赤いぞ？」

「む！う、うむ！問題ない！／＼／＼」

「は、はい！わたしも平気です！／＼／＼」

「そ、そうか、ならいいんだが。」

本人が平気だというのなら大丈夫なんだろう。そう思っていると、バスが発進しだした。

「助かりました、リーダーは毒島さんですか？」

「そんな者はいない、逃げる為に協力しあっただけだ。」

確かに決めてないな。

「もう人間じゃない、人間じゃない！！」

鞠川校医がまるで自分に暗示をかけるようなことを言っている。

「それはいけませんね……………」

「生き残るためにはリーダーが絶対に必要です。」

「目的をはっきりさせ、秩序を守らせるリーダーが……………」

何か紫藤が何か言っているが無視し、鈴音と藍がいる席に移動した。

「兄さんこれからどうなるんでしょうか？」

「世界中がこうなってるからな、安全な場所があるかどうか。だが

「せんずは、家族の安全の確認だ。後のことはまたその時に考えよう。」

「そうですね、私も家族安否が気になります。」

「ああ、藍の家族も無事にいいいな。」

「はい。」

俺たちは無事学校を脱出した。だがこの先にまた新たな困難が待ち受けているだろう、それでも俺は進む。どんな困難な道であろうとも、ブチ抜いて進む。

俺の大切な家族と俺の大切なものを奴らなんかには壊させやしない！それが俺自身の、仮面ライダーとしての、使命なんだからな！！

学園黙示録×色々 第四話（後書き）

これからも頑張って生きたいとおもいます。皆さんの文才と勇気を自分に分けてください！感想にも書いてたんですけど、主人公の設定を変えようかな？

学園黙示録×色々 第五話（前書き）

やばいなあゝ。かなり短い上に更新が遅れた。次はもう少し早く出します。

学園黙示録×色々 第五話

学園黙示録×色々 第五話

「だからよおつ、このまま進んだって危険なだけだつてば!」

「だいたいよお!」

「なんで俺らまで小室たちに付き合わなけりやいけないんだ?」

「お前ら勝手に街へ戻るって決めただけじゃんか。」

「寮とか学校の中で、安全な所を探せばよかったんじゃないのか!」

「そうだよ……このまま進んでも危ないだけだよ……どこかに立て籠もった方が。」

「さっきのコンビ二とか……」

全くうるさいやつらだな。寮や学校に立て籠もってもいずれは奴らに破られてしまうのが分からないのだろうか?俺はこいつらの言葉を左から右に聞き流しながら、窓の外を見るとヘリコプターが飛んでいた。ヘリコプターには遠くて良く見えないが人がぶら下がっていたが、落ちてしまった。丁度鞠川校医と麗も見ていたのか、鞠川校医は目を逸らし麗は顔が青くなっていた。そんでついには、鞠川校医が耐えられなくなったのか、バスを端に寄せて大きな声で叫んだ。

「もういい加減にしてよ！こんなんじゃ運転なんかできない！」

その大声で、さっきからぐだぐだ行ってたやつは黙った。

「まったく、鞠川校医の言う通りだな。はあ。」

「なんだとてめえ！」

「それじゃあ、なんでお前らはバスに乗ったんだ？そいつが言ってた通りに寮にでも膝抱えてこもつてりゃよかっただろう？なんてついてきたんだ？」

「そ、それは・・・！」

「なんだ？口だけは達者だな。なんならさっき通り過ぎたコンビニに置いてきてやろうか？」

「て、てめえっ！！」

いちゃもんつけてきた奴が殴りかかってきたので、足を掬い上げて転倒させる技。

「朽木倒し！」

ゴン！

ふむ。どうやら頭部を強く打ったせいか白目むいて気絶してる。ふう。これで静かになった。他に文句がある奴はいるか？つという意味を込めた眼を向けると、さっきまでギャアギャア言ってた奴らも下を見てるだけだった。一人だけ拍手してくる。

パチパチパチパチパチパチパチパチ！

「実にお見事！」

「いやあ、素晴らしいですね紅君。しかし。」

「こうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなっています。」

「だから、リーダーが必要です。我々には！！」

何言っただこいつ？頭狂ってんのか？いや、前からなのか？俺の代わりに高城が答えた。

「で、候補者は一人きりってワケ？」

「私は教師ですよ、高城さん。そして皆さんは学生です。それだけでも資格の有無は、はっきりしています。」

「どうですか皆さん？私なら・・・問題が起きないようにてをうてますよ？」

パチパチパチパチパチパチパチパチ！

紫藤が言い終わると、殆どの生徒が拍手を شدした。これって一種の洗脳じゃね？

「・・・という訳で、多数決で私がリーダーという事になりました。」

そういつた瞬間麗が鞠川校医に降りるのでドアを開けてと言い出した。そして降りた麗を追って孝も降りた。俺も降りようかなあ。でも鈴音と藍がいるしなあ。冴子に任せようかな？ん？なんで下の名前で読んでるのかだって？バスに乗った時下の名前で呼んでくれと、顔を赤くしながら言われたからだ。助けた生徒の名前は「久賀 美雪」だそうだ。こっちも冴子と同じように頼まれた。どうしたんだろうな？俺も行こうかと思ったら、奴らが乗ったバスが車道にあった車と激突し、2、3m跳んだ後地面に落下し爆発した。

「孝、大丈夫か！！」

「警察で、東署で落ち合おう！！」

「時間は？」

「午後5時に！今日が無理なら明日の同じ時間に！」

「わかった！！」

「そういうことだ冴子、後は頼んだぞ。」

「ん？隼人はどうするのだ？」

「鈴音と藍と美雪に必要な武器になりそうなものを探してくる。」

「ふむ。確かに生身というのも考えようか。分かった、彼女たちは私が命がけで守ろう。」

「お守り代わりと言っちゃあなんだが、これを渡しとく。」

そう言つて俺はあるものを取り出して冴子に渡した。

「これは、刀か？」

「ああ、まあただの刀じゃないんだがな。」

そう俺が渡したのは仮面ライダーサソードに変身できるサソードやイバ-を渡す。冴子なら使いこなせるだろう。

「それは仮面ライダーサソードに変身するために使う刀だ。」

「な！？そんなものを私にかしていいのか！？」

「ああ、冴子なら使いこなせるだろう。後は冴子の意思で変身することもできる。」

「そ、そうか。ならば君の期待にこたえよう。」

その後、俺は鈴音と藍と美雪のどこに行き、説明をした。渋々ながらも納得してもらい、俺はバスを降りた。

「そっついえば兄さん、歩いて行くんですか？」

「いや、バイクで行く。」

「え？でもバイクなんてありませんよ？」

「さっき呼んだから、もうすぐで来るころだけど・・・おっ？来た来た。」

「『『『え？』『』『』』」

そこには誰も乗っていないはずなのに、まっすぐに此方に向かって来るバイクがあった。「ブルースペイダー」仮面ライダーブレイド専用のバイクである。俺はそれに跨りヘルメットをつけてハンドルを握ったところで、鈴音たちを見た。

「必ず戻ってくるから。東署で会おう。」

「わかったわ、兄さん。」

「はいわかりました、隼人さん。」

「うむ、隼人君。また後で。」

「はい、またです。隼人さん。」

俺は一回頷きブルースペイダーを走らせた。さてどこから回るかね。

・
・
・
・
・

行ってしまったな、私は彼女たちに振り向いた。

「私たちも進もう。ここも危なくなってきた。」

「『『『はい。』『』『』』」

そうして私たちはバスに乗り込みバスを進めた。隼人君、君がいな

い間は約束した通り私が守ろう。君に借りたこれを使い奴らから守りきって見せよう。だがそれでも、君が離れていって彼女たちは。いや、私たちは寂しく感じる。私たちをここまで心配させるのだ、無事に帰ってこないとゆるさんぞ、隼人君。

学園黙示録×色々 第五話（後書き）

難しいなあ、小説書くの。次回はもう少し頑張って書いていきます。

学園黙示録×色々 第六話（前書き）

久しぶりの投稿です。最近忙しくて書けませんでした。が、ちよくちよく載せていきます。駄文ですんません！

学園黙示録×色々 第六話

学園黙示録×色々 第六話

冴子達と別れた俺は、あいつらに必要な武器を探すために単独行動に出た。俺がいれば大丈夫だが、念には念をしておかないと後で後悔するかもしれないからな。

「さて、何処から探していくか。」

ブルースペイダーに乗りながら考えていると、銃声が聞こえたので聞こえた方に進路を変えた。銃声の聞こえたところに着くとそこは何ともいいあらわせないものだった。

「うわあゝ、なんじゃこりゃ。生きてる奴も見境なしだよ。」

そこでは奴らに関係なく、生きている人間同士の殺し合いもあった。これはかなりヤバいな、早く武器集めてあいつらの所に戻るかな。

「孝と麗は無事だろうか？」

町中がこんなんになっているんだ、孝と麗も無事であることを祈ろう。ん？

バアーーン！バアーーン！

「どわあ！？」

俺はブルースペイダーに乗りながらも何とか銃撃を避けた。どうや

ら俺の存在に気づいたようで、撃ってきやがった。しょうがない、一先ず武器を奪って気絶させよう。

「悪いがあんたらの武器俺が貰い受ける！」

そう言つて俺はバイクから降り、相手に向かって駆け出した。数は5〜6人くらいか。

「オラァー！」

中華包丁を持った男が上段から切りかかってきたので

「白刃折り三日月蹴り！」

白刃取りした状態から手をずらして中華包丁をへし折ると同時に、前蹴りと廻し蹴りの中間の軌道を描く蹴りを繰り出した。すると、相手は3メートルぐらい吹き飛んだ。

「デメエー！」

今度はナイフ持った男が突っ込んできた。あ、やばい。

「カウ・ロイ！」

首を抑え込み首相撲状態から膝蹴りをもらに顔面に決めてしまった。歯が何本か折れているな後、鼻が曲がつてるぞこれ。

「な、なんて奴だ。全員でやれ！」

銃を持って少し離れたところにいる奴が、リーダーっぽいな。それに

従って、残ってた3人が俺を囲みだした。なんだこいつらは他の奴らと違ってくるってないようだな。

「なあ、あんた。」

「あ？なんだ小僧、今更謝っても遅いぞ。」

「いやそうじゃなくてだな、なんであんたは生きている人まで殺すんだ？」

「そんなの決まっている、楽しいからさあー！男は殺して、女は犯し犯しつくした後は殺して、そして金を奪う！こんな楽しいことやめられるかよ！ヒヤハハハハハハハハ！」

「・・・どうやらこいつらも狂っていたようだ。この外道が！俺の中から静かに怒りが混みあがってくる。」

「・・・そうか。なら俺がやることは一つだ。」

「あ？なんだそりゃ？俺達を倒すともいっつか小僧。」

「倒す？ちよつと違うな。俺は、お前達を徹底的に・・・潰す！」

俺がそう言った瞬間3人が一斉に襲いかかってきた。

まずは跳びかかってきた奴の頭部に。

「ソーク・クラブ！」

回転肘打ちをくらわせて、後ろから襲ってきた奴に。

「迎面一腿加戳掌！（げいめんいつたいかたくしょう）」

敵の攻撃をかわした後、腹部に回し蹴りを一発喰らわせ、その後空中から顔面に掌底打を喰らわせる連続攻撃である。そのまま3人目の目の前に降り立ち。

「最強コンボ！」

「山突き！カウ・ロイ！鳥牛擺頭！朽木倒し！」

空手の山突き、ムエタイのカウ・ロイ、中国拳法の鳥牛擺頭、柔道の朽木倒し。この技の順に出される連続攻撃。防御の難しい山突きが決まることで、流れるような連続攻撃が可能となる。3人目は後頭部を地面にぶつけて白目になって気絶している。さて残るは。

「お前一人だ。」

「ひい！」

そういつて残る最後の一人に歩み寄る。

「く、来るな！来るんじゃないやねええええ！」

俺に恐怖を抱いたのか、銃を向けてくることもなくただ腰を抜けているだけだった。そして俺はそいつの髪を掴みあげ立たせる。

「ひい！や、やめてくれ！」

「お前はそう言ってきた人をどうした？助けたか？」

俺は掴んでた髪を放して構えを取る。

「小さく前にならえ。」

「く、くそがー！ー！」

叫びながらそいつは懷から拳銃を取り出した。だが、遅い！

「無拍子！」

空手、中国拳法、柔術、ムエタイの4種類全ての全身運動の要訣から放つ、必殺の突き。敵への密着状態から先述の全ての動きを一瞬のうちにこなすことで、ノーモーションから最大パワー・スピードでの突きを放つことができる。

「ぐはあ、て、てめえぜつてえ、殺してやる人数かき集めて絶対に貴様を殺してやる！」

「・・・それは、無理だな。なぜなら。」

ぞろぞろと奴らが現れる。

「貴様はここで奴らに食われるんだからな。」

「ひ、ひいいい！」

俺は拳銃と弾をそいつから奪い、離れる。

「さあ、地獄を楽しみな。」

そして俺は親指を下に向けながら言い放つ。

「ぎ、ぎゃあああああ!!」

俺は後ろから聞こえる断末魔を聞きながらブルースペイダーに乗り、俺は仮面ライダーには向いてないかもなっと思っただが、今はそれよりもみんなと合流しよう。武器はさっきの奴らから拳銃とナイフを手に入れたしこれでいいだろう。もう少しいいのがあればよかったんだがしょうがないかっと思いつながら、エンジンをかける。

ブウウウウン!

「さて、行きますか。」

まずはみんなと合流だ。

学園黙示録×色々 第六話（後書き）

久しぶりに打つと疲れるなあ。もう一話載せるので、気が乗ったら見てって下さい。

学園黙示録×色々 第七話（前書き）

連続投稿！がんばりました！まあ、たいした小説ではないですけど、呼んでくれた人には、ありがとうございます！

学園黙示録×色々 第七話

学園黙示録×色々 第七話

あれから俺は、大橋に向かっている。鈴音達はたぶん御別橋に向かっていると思うので、近くにある城の脇道を進んでいけばあっちに繋がっているんで、橋を渡る前に合流できるはずだ。

「ん？うわ。道理で渋滞してるわけだ。」

俺が大橋の前に着くと、そこは警察によって封鎖されている大橋があった。

「ということは、向こうも同じと考えていいな。」

大橋が封鎖されているのだから、隣の御別橋もすでに封鎖されているだろう。すると鈴音達はこっちの橋を確かめに来ると思うので、城の脇道で合流できるかもしれないな。

「そうと決まればいき「隼人！」まず、ん？孝と麗！無事だったか！」

「ああ、なんとかね。他のみんなは？」

孝と麗はバイクに乗ってあらわれた。無事で何よりだが、孝、無免許運転はいかんぞ。ん？おれ？俺は仮面ライダーだからいいんだよ

「俺もあの後、武器を探すためにみんなとは一旦別れたんだよ。」

「そうなんだ。これからどうするの？」

「俺は今から御別橋の方に向かうつもりだがお前らは？」

「僕と麗も同じ考えさ。」

「んじゃ、いこうぜ。ここだと俺達も巻き添えくいそうだ。」

「そうね。」

俺と孝と麗は城の脇道を通りながら合流した後どうするか考えあった。

・ ・ ・ ・ ・

そのころ鈴音達は。

「こういう時だからこそ、我々は藤見学園の者としての誇りを忘れてはなりません。その意味でバスを飛び出していった宮本さんや小室君と紅君は、皆さんの仲間にはふさわしくなかったのです！！」

「生き残るため団結しましょう！」

そう紫藤は生徒に呼びかけていた。それはまるで新興集宗教のようであった。

「マジヤバいわよ。」

「確かにな、あれはまるで新興宗教の勧誘だ。」

「まるでじゃなくて、まんまそのとおりよ。新興宗教……紫藤教の始まりを目にしているの、あたしたちは。」

「話を聞いている連中を見てみなさい。」

そういつて、鈴音達は他の生徒達を見る。それはまるで洗脳のようにもあつた。

「みなさん、とてもヤバい目をしてますね。」

「藍もあれは少し怖いです。」

「ふむ。道がこの有様ではバスを捨てて逃げるしかないな。何とか御別橋を渡って東署へ向かわないと……隼人君との約束がある。」

「ずいぶんと紅……だと鈴音とかぶるわね。隼人のことを気にするじゃない？自分の家族は心配じゃないの？」

高城が眼鏡を光らせながら、冴子に聞く。

「心配だが家族は父一人だし、国外の道場にいる。つまり、今のわたしにとって隼人君との約束以外に、守るべきは自分の命だけなのだ。」

「そして父からは……一度した約束は命に掛けても守れと教

えられた。」

「へーへー。」

どこか微妙に不機嫌な高城であつた。

「あー、えーと、そのね、高城さんのお家はどこなの？」

「隼人や小室とかと同じ御別橋のむこう。」

「あー僕も両親は近所にいないんで、あの、高城さんとかと一緒にらどこでも。」

この後は両親のことを平野に聞いたりして、みんなが驚いていたり、紫藤が嫌いで鞠川校医と一緒にしてくる話などをしていた。すると紫藤が高城達に話しかけてきた。

「どうしたのですか、皆さん？ここは一致協力して……。」

「ご遠慮するわ紫藤先生。あたしたちはあたしたちの目的があるの！修学旅行じゃあるまいし、あんたに付き合う義理なんてないわ！！」

「ほう……。」

両者が少し睨みあっていると、紫藤が先に話し出した。

「貴方達がそう決めたのならどうぞ自由に高城さん。何しろ日本は自由の国ですからね！！」

「しかし……。」

紫藤が上唇を舐めながらとある人物に言い放った。

「貴方と彼女には困りますね、鞠川先生！紅　鈴音さん！」

その言葉に二人が怯えた。

「現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎますし、紅　鈴音さん。貴方がいれば彼、紅　隼人君が此方についてくれます。彼の力はとも素晴らしい力ですので、彼がいるだけでも我々が生き残れる確率はグンと上がるでしょう。」

そう言いながら鈴音に近づこうと紫藤が歩いてくる。

「どうです、残ってもらえませんか？こちらにも貴方達を頼りにする者たちがいるのです。さあ、鞠川先生、紅さん。居場所さえはっきりさせておけば高城さんたちも困った時は貴方達を頼りに……。」

バシユ！

その音とともに紫藤の頬を一本の釘がかすっていった釘は後ろの席に刺さりその近くにいた生徒が悲鳴を上げる。釘を撃ったのは平野であった。

「ひ、平野君……？」

「外したわけじゃない、たまたま外れたんだ。」

「き、君はそんな乱暴な生徒では……………」

「俺が学校で何人やつつけたと思ってるんです？だいたいおまえは前から俺のことバカにしてやがったじゃねーか！！我慢してきた！俺はずっと我慢してきた！隼人がいなければ俺はどうなっていたかわからない！でも、もう我慢する必要はない！！普通なんてなんの意味もない！！」

だからぼくは……………」

「殺せる。生きている奴だって殺せる。」

「ひ、平野君、そ、そんなことは……………」

平野の眼を見て、本気だと感じたのか後づ去りしだした。そこに、毒島がさらなる追い打ちをかけた。

「私も彼との約束があるため、鈴音君を渡すわけにはいかない。彼との約束のためなら、例えどんな者でも、斬る。」

そういつて、隼人から借りているサソードヤイバーを首に突き付ける。

「ぶ、毒島君、お、落ち着くんだ……………」

突き付けたサソードヤイバーを、おさめ鈴音達に降りるよう呼び掛ける。

「それでは降りよう。」

「そうね、いくわよ。」

そして、鈴音達はバスから降りた。

「どう進む？私はこの辺りはよく知らん！」

「とりあえず御別橋を確かめてからがいいわ。」

「たぶん、封鎖されてますよ。これ普通の渋滞じゃないです。」

（ギヤアオ！）

「う、うわぁー！な、なんだこれ！？」

「あつ、私達をあの時助けてくれた確か兄さんがフアングって呼んでました。」

（ギヤアオ！）

「え？」

一声鳴くと少し離れたところに行き、こっちに振り返ってまた鳴いた。

（ギヤアオ！）

「どうしたんでしょう？」

「多分兄さんのところに案内してくれるんじゃないでしょうか？」

「かもしれぬな。」

「なら、いくわよ。」

そして、鈴音達はファングについて行った。

・
・
・
・
・

「こっちも同じね。．．．．．どうする？他の橋を試してみる？」

「たぶん駄目だろう、渡れないようにされてるよ。そうでなければ、規制してる意味がない。」

「ああ。それに、そろそろ来るころだな。」

「？なにが？」

俺は孝と麗に此方に移動してくる人を指さした。

「あ！あれ、あそこ！！」

どうやら向こうも此方に気づいたようだな。

「先生！」

「あらあら宮本さん！小室君も！」

「無事なようになによりだ隼人君、小室君。」

「当たり前だろ。」

「毒島先輩も……。」

俺たちが話していると、服を引っ張られた。

「アタシは？」

「お前は平野が守ってくれてたんだ、無事に決まってるが、まあ、怪我とかして無いようではよくだよ。」

そう言つて、頭を撫でてやる。

「／／／／」

「平野も無事で何よりだ。」

「うん。隼人も無事でよかったよ。」

平野と高城と一緒にいるとまた服を引っ張られた。

「「「わたしたちは？」」」

鋭い目つきで俺を見てくる三人。怖！

「も、もちろん、お前たちも心配してたぞ、鈴音も藍も美雪もな。」

俺は慌てて三人に弁解していた。なんでさ？

「それよりもこれからどうするかを考えるぞ。」

「そうね。」

「……渡河する方法を見つけられないでいる。」

「僕らも同じです。」

「上流は？この辺りは護岸工事とかしちゃったから渡れないけど上流ならいけるかも。ほら小学校の時、遊んでて流された子がいたじゃない。」

「あ……でも、どうかな？この間雨降ったから増水してるし……。」

俺たちが悩んでいると鞠川校医がきりだした。

「あの……今日はもうお休みにした方がいいと思うの。」

「お、お休みって。」

「一時間もしないうちに暗くなるから、暗くなって……出くわしたら紅君や毒島さんでも大変でしょ？」

「それはそうだけど、何処で朝までの時間を潰すの？」

「籠城でもするか。」

「さすがにこの人数じゃ守りきれないだろ。」

「あ、あのね。使えるお部屋があるんだけど、歩いてすぐの所に。」

その言葉に高城が鞠川校医を冷やかした。

「カレシの部屋？」

「ち、ちがうわよ。お、女の子お友達の部屋だけど、お仕事が忙しくていつも空港とかにいるからカギを預かって、空気の入れ換えとかしてるの。」

「マンションですか？周りの見晴らしはいいですか？」

「あ、うん。川沿いに建ってるメゾネットだから、すぐそばにコンビニもあるし。あ、あとね、車も置きっぱなしなの、戦車みたいな四駆よ。」

腕を使ってどんなのかあらわそうとしているがさっぱり分からん。

「移動手段はどのみち必要だ。」

「確かに、今日はもうくたくた。電気が通ってるうちにシャワーを浴びたいわ。」

そういうことで、俺たちは鞠川校医のお友達のマンションに行くことになった。俺は鞠川校医をブルースペイダーの後ろに乗ってもらい、そのマンションを確かめに行くことにした。その時、何故か鈴音達にすごい目で睨まれてしまった。なぜ？

「へえ〜。これが言っていた四駆ですか。」

「ね？戦車みたいでしょ。」

俺はよくわかんが、平野は知っているだろう。そうして待っていると、孝達も来たようだ。

「奴らは塀を越えられないから、ここなら安心だな。」

「ああ、これなら安心して眠れそうだ。」

「まあその前に。」

すると奴らがマンションの中から数人出てきた。

「こいつらを片付けないとな。」

「ああ、行くぞー!!」

こうして俺たちは奴らから逃げるのではなく初めての攻めにでた。そして、奴らと出会ったの初めての夜が始まる。

学園黙示録×色々 第七話（後書き）

次はいつ出せるか分かりませんが、頑張ってください。

学園黙示録×色々 第八話（前書き）

やっと投稿ができた。この三カ月考えながら書いてたんですが、なかなか決まらずに途中で投げ出したりもしましたが、何とか書けました。つまらないかもしれませんが、ぜひ読んでみてください！それとぜひ、アドバイスなどもくれるとありがたいです。

学園黙示録×色々 第八話

学園黙示録×色々 第八話

あれから俺たちは、無事にマンションを手に入れることができ、さつきまで女性陣は風呂ではしゃいだりもする。俺達男性陣は銃を手に入れることができ、その後も色々あったが、まあ、大したことはない。それよりも今現在の俺たちの状態がヤバイ。

「……………」

「こりゃー、ひどいな。」

「畜生、ひどすぎる……………」

今俺と孝と平野と冴子でベランダに出ている。吠えてる犬に引かれて奴らがマンションに近づいてきていた。すると、孝が下の階に降りようとしている所を平野に止められた。

「小室っ!」

「なんだよ?」

「撃って、どうするつもりなの?」

「決まってるだろ! 奴らを撃って……………」

「忘れたのか? 奴らは音に反応するのだぞ小室君。」

「・・・・・・・・・・！」

「そして、生者は光りと我々の姿を目にし群がってくる。無論、我々は全ての命ある者を救う力などない！！」

「で、でも！隼人の力さえあれば！！奴らなんか・・・・・・・・！」

「孝、確かに俺の力いや、ライダーの力を使えば助けられるかもしれない。」

「だ、だったら！！」

「でもな。それでも、助けられない命もあるんだ。」

「！！！」

「小室君、君は過去一日に対して厳しくはあるものの、男らしく立ち向かってきた。だが・・・・・・・・よく見ておけ、慣れておくのだ！もはや、この世界はただの男らしくあるだけでは生き残れない場所と化した。」

そういつて冴子は一階に降りていった。

「・・・・・・・・・・。」

「孝、冴子もあんなふうに言っているが、あいつもこんなことを好んでるわけじゃないんだ。それだけは、分かってくれ。」

「・・・・いや、僕の方こそごめん。」

俺は孝の肩を叩いた後、孝は双眼鏡を覗いて外の様子をみていた。

「・・・地獄だ。」

「確かにこれは地獄と言ってもいいな。」

俺は双眼鏡がなくても視力がいいのでかなり遠くの方まで見ることができる。すると、子供を連れた人を見つけた。ドアをノックしている所を見るとそこには人が住んでるのだろうことが分かる。持っている武器でドアをブチ壊そうとしているが、その前にドアが開いた瞬間。

「!?!」

「なんてことを!?!」

ドアが開いた瞬間に、家の中にいた人が、包丁で子供の父親と見受けられる人を刺したのであった。そして再びドアはしまった。完全に取り残された子供の鳴き声に奴らがどんどん近づいていく。このままじゃ、ヤバイ!

「ロックンロール!!」

ガウッ!

「試射もしていない他人の銃でいきなりヘッドショットをキメられるなんて! やっぱ、こういうことは天才だなあ、俺。ま、距離は100もないけど。」

平野はそう言ってさらに子供に近づいて来る奴らにヘッドショット

をキメている。

「ナイスだ平野！いくぞ、孝。あの少女を救いに。」

「ああ！」

「僕はここから援護するから！！」

「頼りにしてるぜ、平野！」

俺と孝はそういつて一階に降りていく。すると、階段のところに麗と冴子がいた。

「どうしたの？」

「小さな子を助けに行く。」

「あたしも一緒に。」

「いや、麗と冴子はここを離れる為の準備をしてくれ。少女を助けたら、ここから逃げるぞ。」

「どうして？」

「銃声で奴らがここに集まってくるからだよ。冴子、後は任せたぞ。」

「わかった、彼女たちは何があっても守る、安心して行ってこい！」
俺と孝はそれぞれのバイクに跨った。

「孝、銃を使うときはきおつける。バイクは動くために音を出す
が、銃は撃つために音が響く。撃った時は硬直状態になるから注意しろ。」

「わかった。」

俺は腰にブレイバックスを装着し、構えをとりそして言い放った。

「変身!!」

(Turn Up)

ターンアップハンドルを起動させ、オリハルコン・エレメントを放出する。それを通過することで俺は、仮面ライダーブレイドに「変身」することが出来る。

「隼人その姿もライダーなのか？」

「ああ。今の俺は、仮面ライダーブレイドだ。」

「そうか。・・・隼人。」

「ん？なんだ？」

「さっきの話で、それでも助けられない命もあるっていったよな？」

「・・・ああ。」

「でも、僕はいや、僕たちは隼人のおかげで助かったんだ。助けられない命もあるかも知れない、でも助けることが出来た命もあるはずだ！僕たちも一緒に戦うから！だから必ず、あの少女を救い出そう！」

俺は孝の言葉に冴子と麗を見ると二人ともうなずいていた。すると孝が右手を出してきた。

「行こう、隼人！」

「・・・ああ！」

俺は孝の手を握った。

「では、開けるぞ。」

二人同時に頷いた。

そうして俺と孝はマンションからバイクで飛び出し、少女を助けに向かった。

・ ・ ・ ・ ・

私の名前はアリスって言います。今アリスはパパに手を引つ張られて、一つのお家に入りました。アリスは今いないママが気になったので、パパに聞いてみました。

「パパ、ママは？」

「ママとは後で会える。ほら、こっちだ。」

そう言った後、パパはお家のドアを叩きました。

「お願いです！入れて下さい！子供連れで、逃げられないんです！」

「来るな！よそに行ってくれ！」

「頼む！自分はどうでもいいんです！子供を、娘を！」

パパはドアの向こう側にいる人に声をかけましたが、断れてしまい最後には返事も返ってきませんでした。アリスはパパに声をかけました。

「パパ……。」

「開けてくれ！開けてくれなければ、ドアを壊す！」

アリスはパパが声を大きくしながら言ったことに驚いてしまいました。パパの言葉にドアの向こうにいる人が声を返してくれました。

「ま、待ってくれ！いま開ける。」

「ありがたい！」

「たすかつ……（ドッ）……あ……。」

ドアが開いた瞬間、パパは刺されました。

「許してくれ……許してくれ……。」

そしてドアを開けパパを刺した人は謝りながらドアを閉じました。
アリスは急いでパパに駆け寄り声をかけました。

「パパ！パパ！」

「ゴホッ！パパは大丈夫だから……。隠れなさい、誰にも見つからないように……。どこかに、かくれて……。……。」

「いやだあ、いやだよお。」

アリスは目を閉じているパパの体を揺すりました。でも、パパはもう何も言っではくれません。アリスはパパに泣きながら顔を抱き締めました。

「パパと一緒にいるう、ずうつとパパと一緒にいるのお！！」

アリスは泣き叫んだ。自分の大好きな父親を目の前で殺されたため。そしてその声に群がる奴ら。アリスはそれに気づくこともなく泣き叫ぶ。奴らの一体がアリスを襲おうとした時、その一体の頭が吹き飛んだ。何が起きたか分らないアリスは、隅の方へと逃げて行った。

アリスはもう何が何だかわかりません。パパは目の前で殺されて、周りの人たちがアリスを襲ってきます。なんで？なんでアリスを？なんで？さつきからアリスを周りの人から守ろうとしてくれる犬がいてくれます。

「ひっ、やめてえ、こないでえ。あたし、悪いことなにもしてないのに。」

それでも、アリスを襲おうと口を大きく開けて襲ってきます。

「いやああああ！！」

だれかだれか助けて！

（ライトニングソニック）

「ウエエエエエエイ！」

その音声と声が聞こえた瞬間、目の前にいた人が青白い光を纏った人に蹴り飛ばされ爆発しました。

・ ・ ・ ・ ・

「怪我はないかお嬢ちゃん？」

「う、うん。」

「ならよかった。小室、この子を頼む。」

「わかった！」

ふ。何とか間に合ったな。バイクに乗って孝と玄関まで来たのは良かったが、孝が玄関でバイクを転がしてしまったせいで、俺のブルースペイダーは玄関前に置いてきた。まあ、それよりこの子だなあ、あいつら俺のブルースペイダーを倒しやがった！しかも踏み台にしてやがる！後で覚えてろよ！！

「さてとこれからどうするかだな。」

「あ、あの。」

「ん？どうしたんだ？お譲ちゃん。」

「パパは・・・死んじやったの？」

「・・・・・・・・。」

その言葉に俺と孝は一瞬考えた。この子に何と説明すればいいのだろうか。そう考えていると孝が洗濯されていた服をこの子の父親にかぶせて、一本の花を摘んだ。

「お兄ちゃん？」

「君を守ろうとして死んだんだ。立派なパパだ。」

「ああ、君の父親は誇りに思えるほどに立派だ。」

そして彼女は、孝から花を受け取り、服をかぶせた父親の上に置いた。

「うつうつ・・・パ・・・パあ・・・。」

譲ちゃんはずいには泣き出した。俺はまた守ることができなかった。この子の笑顔を。この子の父親を。この世界を・・・いや、それはさすがに贅沢か、世界そのもの守ることなんて、最初からできない。だから今は・・・俺の大切なこいつらをこの命尽きるまで守っていこう。

じいーーーーー。

ん？なんか譲ちゃんがこちらをジッと見てくるな。どうしたんだ？

「どうかしたかい、お譲ちゃん？」

「え、えっと、その・・・お兄ちゃん達の名前は？」

「俺は紅 隼人。こいつは小室 孝だ。お譲ちゃんは？」

「私はアリス！」

「そうか、いい名前だな。」

俺はそう言って、アリスちゃんの頭を撫でてやる。

「えへへ。」

「さてと、まずはここから抜け出さないとな。」

「逃げられないの?」

「道路いっぱいにいるんだ。」

「道路じゃないとをにげたらいいのに。」

「空でも飛べつてのか……。」

キュピーーーーーン!!

「それだ!! その手があつた!!」

「「え?」」

俺は左腕に装備してあるパワーアップアイテム、ラウンスアブゾーバーを見た。ふっふっふっふっふっ、ブルースペイダーの恨みを今返す時が来た! 俺は黒い笑みを浮かべながら(仮面で顔は孝達にはみえていないが何故か怯えている)ラウンスアブゾーバーからJとQのカードを抜き取る。

それを インサート・リーダー にQ「ABSORB」を挿入、さらにJ「FUSION」をラウスすることによって強化変身した、カテゴリーJの力をまとった高機動形態。^{ジャック}「仮面ライダーブレイド ジャックフォーム」に変身する事が出来る。身体各部分が金色のアーマー ディアマンテゴルド に覆われ、胸部にはスピードのカテゴリJの鷲の紋章 ハイグレイドシンボル が刻印され、全ての能力が飛躍的に上昇し、さらに背中に装備された オリハル

コンウイングを展開することによって空中を飛行することも可能となった。

手に持っていた醒剣ブレイラウザーは、ジャックフォームへのフォームチェンジによって、先端に追加された鋭い刃 デイアマンテ・エッジ によって、切れ味・硬度も通常時の1・5倍にまで上昇している。

「よし、これでいける。」

「は、隼人。その姿は何だ？」

「ん？この姿はだな、強化形態としか言いようが無いな。」

「強化形態？つまりは、前よりもさらに強くなったってことか？」

「ああ、その通りだ。後、今の俺は空も飛ぶことができる。」

そういつて俺はオリハルコンウイングを展開して見せた。

「それじゃ、アリスちゃんは俺が抱えるから、孝は背中につかまってくれ。」

「わかった。」

そして俺はアリスちゃんを抱え、孝が背中につかまったのを確認して、飛んだ。

「わあゝ。すごい！」

「ほ、ホントに飛んでる。」

アリスちゃんは飛んでることはしゃいでいるが、孝はあまりの高さに顔が少し青いな。孝の腕が疲れる前に、みんなと合流するか。

そ・の・ま・え・に。俺は孝とアリスちゃんを近くの屋根に降ろした。

「どうしたんだ隼人？」

「？」

孝が屋根に降ろされたことに疑問を持ったのか聞いてきた。アリスちゃんは首を傾げている。

「なあゝにちよつとばかりヤルことがあるだけさ。」

俺は仮面の下から素敵な笑顔をつくって振り返った。すると、二人とも身を寄せ合い震えていた。んゝ？どうしたんだあゝ？寒いのかなあゝ？

「や、やることって？」

ガクガクブルブル震えながらも懸命に聞いてくる孝。その質問に俺は優しく答えてやることにした。

「それはなあゝ。」

「「そ、それは？」」

「あのクソ野郎どもが俺の愛車ブルースベイダーを踏み台にしてるからぶった切つてやるんだよおおおおおお！！！！！！！！！！」

そう叫んだ後、俺の愛車を今も踏み台にしている奴らに突っ込んでいった。刻みつけてやる！教訓を！

学園黙示録×色々 第八話（後書き）

次は、もう少し早く出せるように頑張ります。

学園黙示録×色々 第九話（前書き）

久しぶりの投稿だぜ！ホントはずいぶん前から出来てはいたのですが、投稿するのを忘れてました！すんません！
次回は、外伝でも書いてみましょうかねえ。

学園黙示録×色々 第九話

学園黙示録×色々 第九話

「漕げ漕げ漕げよ、ボート漕げよー」

「らんらんらんらん」

「川くーだりー」

あれから俺たちは無事にあの場から逃げることに成功した。俺のバイクをめちやくちやに汚してくれた奴らを斬って斬りまくり、冴子達がハンビー出迎えに来たので孝とアリスちゃんをハンビーに乗せた後俺も変身を解除して乗り込み、脱出した。無事にバイクを回収したが、奴らのせいで汚れたので家に帰還させた。そして今俺たちは、ハンビーに乗ったまま川を渡っていた。そこで、平野とアリスちゃんが一緒に歌を歌っていた。

「漕げ漕げ漕げよ、ボート漕げよー」

「らんらんらんらん」

「川くーだりー」

いやあ、仲がいいねお二人さん。アリスちゃんもあんなことがあった後なのに、元気に歌を歌っていた。この子が俺にはとてもたくましく見えた。それにしても、平野の目がなんか興奮した目でアリスちゃんを見ているのは気のせいかな？高城は双眼鏡を使い周囲を見回している。すると、平野とアリスちゃんが英語で歌いだした。へ

えゝ、アリスちゃんは英語でも歌えるのかつて、平野。その歌はダメだろつと思つていると、高城に歌のことで怒られていた。それにしても。

「静かすぎるな。」

まだ川を渡っている途中だが、昨日までと違いあまりにも静かすぎる。まあ、そこからはこの川を渡ってからでも考えよう。

「それにしても。」

そう言つて俺は後ろを向く。そこには、孝と麗が肩を寄せ合いぐつすり寝ている。その隣には冴子と藍と美雪が寝ているが、やはり少し狭そうだな。俺は助手席に座り隣には鈴音が俺の肩に頭をのせて眠っていた。川を渡りきったら、俺はバイクに乗り換えるかな。狭いと窮屈だろうし。おっと、そろそろ渡り終わるから孝達を起こそう。

「みんな、そろそろ川を渡りきるぞ起きろ。」

俺の声に寝てたみんなが反応する。孝だけまだ寝ているけど、あとは麗に任せよう。一先ず俺は降りようかな。ここからだけじゃ判断が難しい。

「ふむ。」

奴らは、いないようだな。後で堤防登つてみないとな。

「小室、手伝つてくれ。アリスちゃんを降ろす。」

ん？ああ、アリスちゃんを降ろすのか。そう思っているとアリスちゃんがスカートを押さえた。どうしたんだ？…………ああ、なるほどな。

「孝、ちょっとここに来い。」

「うわっと、どうしたんだよ隼人。」

俺は孝の服を掴み、アリスちゃんから引き離す。

「鈴音、アリスちゃんを頼む。」

「うん、わかった。」

そういつて、アリスちゃんに近づいて孝の代わりに抱っこする鈴音。

「なあ、なんで鈴音ちゃんにやらせたんだ？」

「ん？アリスちゃんは今パンツはいてないんだから、高い所から降るせばスカートの中丸見えだろ。いくら、まだ小学生とは言え女の子は女の子だからそれぐらい察してやれ。」

「そっか、そうだな。次からは気をつけるよ。」

「ああ。」

そうしていると、平野もここに来た。

「どうやらみんな着替えるらしいよ。」

「そうか、そんじゃその間ジークとでもじゃれよくか。」

「わんっ！」

「お、相変わらず元気だな。」

この犬の名前はジークにした。ジークってのはアメリカ軍がつけた零戦のアダ名で、もちろん思いついたのは平野だ。小さくて元気で勇気があって……、確かにぴったりの名前だった。俺がジークとじゃれてるうちに、着替えは終わり孝も平野にショットガンの使い方を教えてもらっていた。

「んじゃ、堤防を登るぞ孝、平野。」

「ああ。」

「そうだね。」

そのまま俺たちは堤防に登り安全を確認し、ハンビーを登らせた。なんか平野がブツブツ言っていたがどうしたんだろうな。それにしても。

「川で阻止できたわけじゃないみたいね。」

「そうみたいだな。」

ざっと見た感じじゃ、普通の景色に見えるが、所々に車や道路に血の跡がついている。

「世界中が同じだとニュースで伝えていた。」

「でも、警察が残っていたらきつと。」

「そ、そうですね！警察の方が残っているのならきつと。」

「・・・・・・・・・・。」

「そうね、日本のお巡りさんは仕事熱心だから。」

「うん・・・・・・・・うん！」

「はい！」

確に残っていたらどうかしているかもしれない。だが、あの二ユースを見た限りどうなっているのか。・・・・・・・・いや、今はこれからどうするかを考えよう。

「わっ！ここにも！もういやっ！」

「じゃあそこを左、左よ！」

あれから俺たちは話し合った結果、最初は高城の家に向かう事にした。だが、高城の家に向かう道の先には奴らがうじゃうじゃいた。だがなんで、高城の家に近づいていくと奴らはどんどん増えていくんだ？そう思いながら、俺は孝達が乗るハンビーの後ろをカブトエクステンダーで追いかける。って、ん？なんだあれ？

「このまま押し退けて！！」

あれは・・・マズイ！！

「鞠川校医！ハンビーを停めろ！」

「え？」

「ワイヤーが張られている！車体を横に向ける！」

俺と冴子の声に従って、鞠川校医は車体を横に向け、止めようとする。

「！？」

「滑りすぎてる！」

「停まって！なんで停まらないの！」

「人肉、い、いや、油脂で滑ってるの！-！」

どうやら油脂で車体が滑りすぎたようだ。

「先生！タイヤがロックしてます！ブレーキ放して少しでもアクセルを踏んで！！」

「え？ええ！」

鞠川校医は平野の言う通りにした。

「先生っ、前っ前っ！」

孝の声で前を向くと目の前には壁が迫っていた。

「あたしこういうキャラじゃないのに！！」

そういつて鞠川校医は、急ブレーキをかける。だが、急に止まったせいで、麗が車体から投げ出され、体を強く打ちつけてしまった。それを見た俺と孝は急いで麗に近づいた。

「麗！大丈夫か！？」

「孝！麗は任せたぞ！」

「わかった！」

そして俺は、麗を孝に任せ、奴らに振り向いた。

「お前らと遊んでる暇わねえ。速攻で終わらせる！冴子！！」

「ああ。」

俺が呼ぶと、冴子がハンビーから出てくる。

「やれるな冴子。」

「フフ。君となら負ける気がしないよ。」

俺と冴子は同時に微笑みあう。

俺は、腰にライダーベルトを装着する。冴子は、サソードヤイバーを取り出す。

「カブトゼクター！！」

「サソードゼクター！！」

そして俺はカブトゼクターを、冴子はサソードゼクターを呼びだす。カブトゼクターは天から。サソードゼクターは地から現れた。そしてお互いの手にゼクターを掴む。

「変身！！」

『Henshin』

俺はベルトに、カブトゼクターを合体させることで、仮面ライダーカブト（マスコドフォーム）に変身し、冴子はサソードヤイバーに、サソードゼクターを合体させることで、仮面ライダーサソード（マスコドフォーム）に変身することができる。

「行くぞ、冴子。」

「ああ。」

俺の掛け声で、冴子と一緒に奴らへ向かって駆け出す。

「はあっ！」

「ふっ！」

俺は、カブトクナイガン・アックスモードで首を切ったり、ガンモードにして高エネルギーイオンビームを撃ちまくる。冴子は、ソードヤイバーで首を跳ねたり、頭に突き刺したりして倒していた。あらかた倒した俺たちは、背中合わせで奴らと対峙する。

「そろそろ一気に片付けるぞ、冴子。」

「うむ。わかった。」

そして俺はゼクターホーンを掴み、冴子はサソードゼクターの尾部を倒す。

「「キャストオフ！」」

その言葉と同時に俺と冴子は、ゼクターホーンを反対側に倒し、サソードニードルをヤイバーに押し込む。

『Cast Off』

『Change Beetle』

『Change Scorpion』

キャストオフしたことによって俺は、仮面ライダーカブト（ライダーフォーム）になり、冴子は仮面ライダーサソード（ライダーフォーム）へと変わった。

「クロックアップ！」

『Clock Up』

キャストオフした瞬間に俺たちは、クロックアップして奴らを次々に倒して行く。そして残り少なくなったので俺と冴子は、必殺技を使うことにした。

『1, 2, 3』

カブトゼクター上部の脚3本それぞれに内蔵されたスイッチ・フルスロットルを「1, 2, 3」の順に押した後、ゼクターホーンを一旦マスクドフォーム時の位置に戻し、再び倒す。

「ライダーキック。」

『Rider Kick』

俺は、波動に変換したタキオン粒子を右足に収束させ、一ヶ所に集まった奴らに、回し蹴りを使ったライダーキックを喰らわせ、天を指し示すポーズをとる。

冴子は、サソードニードルを一旦マスクドフォーム時の位置に戻し、再びサソードヤイバーに押し込む。

「ライダースラッシュ。」

『R i d e r S l a s h』

ポイズンブラッドとタキオン粒子を混じり合わせた光子を、サソードヤイバーの刃先に集約させた光刃で、一体一体斬り倒して行く冴子。

『C l o c k O v e r』

その音声が聞こえると同時に、奴らは爆発した。そして俺と冴子は周りを見渡す。

「・・・もついないな。」

「ああ。」

俺と冴子は周りを見渡したが奴らの姿はない。安心した俺と冴子は変身を解き、孝達の所に駆け寄った。

「みんな無事か？」

「私たちは無事よ。」

そう言って、高城達がハンビーから出てきた。

「そうか。孝、麗はどうだ？」

「背中を強く打ったみたいだ。」

やっぱりか。なら、麗は孝に任せよう。

「わかった。孝は麗に肩を貸してやれ。ハンビーはここに置いて、必要な荷物だけ持って行こう。多分このワイヤーは、ワイヤーの向こう側にいる人たちが張ったものだろうから、ここよりは、安全だろう。」

「きっと、パパとママが指示でワイヤーを張ったんだと思うわ。私の家はすぐそこだから。」

「なら、そろそろ行こう。また、奴らが集まってきても困るからな。」

俺、高城、冴子の順に言葉を発して、それにみんなが頷く。そして、必要な荷物だけ取り出し、準備をする。

「みんな準備はいいか？」

俺の言葉にみんなが頷く。

「よし。いくぞ！」

そう言って俺たちはワイヤーを潜り、高城の家を目指して歩き出す。

あつ、カプトエクステンダー忘れてきた。

学園黙示録×色々 第九話（後書き）

今回は、冴子さんに変身してもらいました！何となく声に出して、ゼクターを呼んでみましたがどうでしょうか？その他にもだれか変身させようか悩んでいます。後、響鬼をどこで出そうか悩んでいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6617m/>

学園黙示録×色々

2011年11月24日14時46分発行